

第四回国際法華経学会に参加して

ロバート・F・ローズ

一

五月一日の午後三時半、私の乗ったKLMのジャンボ機はアムステルダム郊外のスキポール空港に降り立った。数時間まえに飛び立った日本は摂氏三〇度をこす真夏日であったが、オランダの気温は一二度。妻が念のためにと手荷物に入れてくれたオーバーがさっそく役にたった。

入国手続きを簡単にすませ、空港内の駅から列車に乗り、どんなよりとした空の下に広がる田園地帯を二〇分ほどゆくと、世の佇を今も残す静かなライデン市に到着した。ライデンといえば、法華経を初めて英訳したことで有名なヘンドリック・ケルン (Hendrik Kern 1833-1917) が一八六五年から一九〇三年の間、教鞭を取っていたライデン大学の所在地である。昨年の夏、友人のポール・グローナー教授からケルン緑りのこの大学で、今年 (一九九八年) の五月一日から三日まで「東アジアにおける法華経の思想と実践の展開」(The Development of Lotus Thought and Practice in East Asia) というテーマの

とで、第四回国際法華経学会 (The IVth International Conference on the Lotus Sutra) が開催されることを聞いた。よくよく南山大学のポール・スワンソン教授から現地の大会コーディネーターのルチア・ドルチェ (Lucia Dolce) さん (当時ライデン大学、今はロンドン大学教授) の住所を教えていただき、彼女に問い合わせたところ、幸いにもこの学会で研究発表を行う機会を与えられた。このような事情で、はるばるヨーロッパにやって来たのであった。

国際法華経学会は十五年ほどまえに結成され、その第一回大会は一九八四年にハワイ大学で行われた。その後、不定期ではあるが、第二回大会は立正大学で、第三回大会は再びハワイ大学で開催された。この学会の最大の特徴は、日本のみならず、欧米からも多くの学者が参加し、東西の法華経研究者の国際的な交流の場となっていることである。今回も日本やアメリカを初め、オランダ・フランス・ドイツ・イギリス・イタリアなどのヨーロッパ各国からも、多くの人々が参加した。

ライデン到着後、すでに現地入りしていた他の参加者と合流し、さっそく六時からの大学でのオープニング・リセプションに向かった。宿舎のホテルを出て、高さ二九メートルもある古い風車を改造した風車博物館の脇を通り、町の中央広場を横切り、まるで絵葉書のようにきれいな運河ぞいの石だたみの道をすこし歩いてゆくと、すぐにライデン大学が見えてきた。

聞くところによると、この大学の創立は一五七五年にさかのぼる。その当時スペインの支配下にあったオランダは、独立を

求めてスペイン軍と交戦の最中であつた。その戦争のなかで、ライデン市はスペイン軍に包囲され、外壁も突破されたが、オランダ兵は、今でも市の中心部に残るブルクト (Burcht) という小さな円形の石の城塞に立てこもり、ついにスペイン軍を撃退することに成功した。そこでライデン市民の勇気をたたえて、オランダ王は褒美として、長期間の減税措置などを含む、いくつかの特権を示して、好きなものの一つを選ぶことを許した。思案の結果、当時のライデン市長は市内に大学を建設することを申し出た。これがライデン大学の始まりである。

リセプションは日本・韓国研究センターの施設がある古い建物の中庭でおこなわれた。このリセプションでは、もと大谷大学の大学院生で、華嚴経の研究のためにライデン大学に留学している井尻祐子さん（彼女は学会中、通訳として活躍した）をはじめ、多くの旧友と再会し、和やかな一時を過ごすことができた。このリセプションで私たちは中国仏教研究の長老、エリック・ツェルヒャー (Erik Zürcher) 博士から歓迎の挨拶をいただいた。博士の *The Buddhist Conquest of China* (『仏教による中国の征服』、一九五九年出版) はあまりにも有名な書物であるが、この挨拶で博士は、初期中国仏教の研究者らしく、竺法護の『正法華経』を取り上げ、この經典の翻訳の背景や中国仏教の発展のなかでこの經典の果たした役割などについて語ってくださった。そして二八六年の九月二日に『正法華経』の翻訳が完成されたことを記念して、今回の国際法華経学会は九月二日を開催日にするべきである、というウィットに満ちた提案

をなさつて、スピーチを終えられた。

二

五月二日の午前三時ごろ、ライデン市は激しい雷雨に見舞われ、私たちは皆、眠りから叩き起こされた。幸運にも朝には雷雨は治まって学会には何の支障もなかったが、今振りかえつて見ると、この雷は正しく法華経の教法が開顕されようとすることを示す奇瑞であつたように思われてならない。

朝の食事を終えた後、九時の開会式に遅れないようホテルを出て、大学へ急いだ。会場のライデン大学一七五号館は、大学の中心に立つ近代的な建物であつた。その建物の二階の明るく居心地のよいセミナー・ルームが、二日間の研究発表の場となった。

形式ばつた日本の学会とは違い、学会はドルチェさんの「おはようございます。第四回国際法華経学会を開催します」という一言で開始された。最初にライデン大学の著名なインド学者であるティラメン・フェッター (Tilman Vetter) 博士による基調講演が行われた。「H・ケルンと法華経」(H. Kern and the *Lotus Sutra*) と題されたこの講演で、フェッター先生はケルンが一八八四年に完成した法華経の英訳とその序文、さらにはケルンが南条文雄と共に校訂したサンスクリット・テキスト (Bibliotheca Buddhica vol. X, 1908-12) を取り上げ、そこに提示されているいくつかの課題を検討し、ケルンの法華経研究への貢献を偲んだ。

フエッター博士の基調講演に続いて、二日間にわたって、四つのセッションに分れて延べ十一の多彩な研究発表が行われた。各々の発表者は、三十分の発表の時間が与えられていたが、各発表の後には、ディスカッサント (discussant) がそのペーパーについて十分程度の批評を加え、その後には全員による質疑応答の時間が設けられていた。そのため、一つの発表に約一時間が費やされ、充実した発表と討論が行われた。以下、この学会での発表について、簡単に紹介して行きたいと思う。(日本語で発表された伊藤瑞穂教授と北川前肇教授以外、すべての発表者は英語で発表され、また学会プログラムでも発表題目はすべて英語で記載されていた。そのため、日英両国語で題名を提示してくださった伊藤・北川両先生の発表題目を除いて、ここで挙げる日本語の題目や各セッションのタイトルはすべて私自身の訳であることを予め断わっておきたい。)

三

◇第一セッション 司会 三友健容 立正大学

テーマ「テキストとその変革」(The Text and its Transformations)

第一セッションでは、ハワイ大学のウィラ・タナベ (Willia Tanabe) 教授、大正大学の一鳥正真教授とカンザス大学のダニエル・スチーブンソン (Daniel Stevenson) 教授の三人の先生が発表を行った。東アジアの美術史を専門とされるタナベ教授の発表は「目に見える信仰と日本における法華経」(Visual

Pietry and the Lotus Sutra in Japan) というものであったが、そのなかで先生は、法華経を題材とした日本の絵画について考察された。先生はまず大和文華館所蔵の法華経普賢勸発品の写経とその見返りの絵を取り上げ、この一巻は単に読まれるために作成されたのではなく、目に見える形で法華経の信仰を表明するために作られたことを強調された。さらに経文の一文の文字を蓮台の上に写した「一字蓮台経」や法華経を仏塔の形に書き写する「法華経経塔曼荼羅」などに言及し、これらは仏陀の身全体が法華経の中に含まれている(あるいは法華経自体が仏舍利である)と見なす思想の現われであると論じられた。

次に、一鳥先生は「Sūtrasamuccaya」に引用される法華経(The Lotus Sutra in the Sūtrasamuccaya) において、法華経はSūtrasamuccayaの中に四回引用されていることを指摘し、それらの箇所を英訳し詳しく考察された。発表の後半ではSūtrasamuccayaの如来蔵思想を検討されたが、その一環としてすべての人間が持つDNAに注目し、如来蔵はDNAと同じものではないかと論じられた。仏教思想を現代の科学と関連させた、刺激に満ちた発表であった。

最後のスチーブンソン教授の「選択されなかった道—中国中世における經典のヘゲモニーと権威ある法華経の形成」(Paths Not Taken: Scriptural Hegemonics and the Formation of an Authoritative Lotus Sutra in Medieval China) と題された発表は、私にとっては、今学会のなかで最も興味深いものの一つであった。その中でスチーブンソン教授は、法華経の

一部分をなすと称される書物が中国で多く作成された点に注目し、特に敦煌文書の中に残る法華經度量天地品を取り上げ、それを詳しく分析し、その作業を通じて中国における所謂偽經の問題について様々な面から考察された。周知のように、中国では多くの偽經が生み出されたが、それらの中には無量義經や觀普賢經など、最終的には仏説と認められたものもあれば、ついに偽經として排斥されていったものも多く存在した。それらの偽經は様々な方法で作成されたが、例えば『出三藏記集』には、トランス状態に入り新しい經典を誦出した南斉の尼子についての記述が残されている。仏教教団は、それらの經典の真偽を判断するために、その翻訳の記録が信頼できるものか、従来の記録にその名が見られるかなど、いくつかの基準を生み出した。

さらにその判断に基づいて、各經典の真偽についての見解を明確に記述した経録を多く編集した。ここで特に注意しておかなければならないことは、この場合これらの経録は各仏典の真偽を決定し、その決定を中国のみならず東アジア全土に流布させる役割を果たしていたことである。つまり、これらの経録は仏教典籍を統制し管理する上で重要な役割を担っていたのである。

そのような偽經のなかに、法華經の第二十九品と自称する度量品がある。これはスタイン招来の敦煌文書の中から発見されたものであるが、そのなかには三十三天を中心とした独特の宇宙観が示され、法華經を受持することによって仏身を得て、天地の頂点たる第二十一から三十三天のあいだに往生することができる¹と説かれている。以上ように度量品の教義について細か

く紹介されたあと、スチーブンソン教授はさらにこの度量品が道教の『太上中道妙法蓮華經』と深い関係にあると指摘されて、研究発表を終えられた。

午前の研究発表は以上で終了し、出席者は皆、市の中心にあるレストランへ移動し、そこでハムやチーズがたくさん詰まったオランダ名物の巨大なクレープ式バンケーキを味わった。直径三〇センチもあろう「おぼけバンケーキ」との遭遇は、私のみならず、多くの学会参加者にとって、ライデンのハイライトのひとつになったのではなからうか。とにかく動けないほど満腹になって大学へ戻ると、二時半から午後の研究発表が開始された。

◇第二セッション 司会 リチャード・バオリング (Richard Bowring) ケンブリッジ大学

テーマ「テキストとその解釈」(Interpreting the Text)
午前のセッションと同様に第二セッションでも三人の研究発表がおこなわれた。最初に発表したのは立正大学の伊藤瑞毅博士であった。博士の「経題 Saddhamapundarika について」(A Study on the Meaning of the Sutra Title Saddhamapundarika) は、法華經のサンスクリット・テキストの経題の一部をなす Saddhamapundarika の語について詳しく説明された発表であった。先生によると、法華經自体はその題名の Saddhamapundarika の語を解釈していない (つまり nirukti がない)。そこで博士は、その語を正確に理解するために、諸

經典における pundarika (白蓮華) の譬喩の用例を調査され、さらには薬王本事品に見られる蓮華の十喩を丹念に検討された。その研究の成果をここで発表されたのであるが、その結論は「……法華経において pundarika は Saddharma を所喩＝譬喩されるものとすると同時に、さらに所喩として一方で……父なる仏陀釈尊を連想せしめ、他方で Saddharma を受持する……菩薩ないし地涌の菩薩……をも予想せしめるものである、と見てよいことになろう」というものであった。

つぎに「本覚と観心の解釈学―日本中世における法華経の注釈書」(Original Enlightenment and the Hermeneutics of Mind-Discernment [Kanjiri]: Lotus Sutra Commentaries in Medieval Japan) という発表のなかでプリンストン大学のジャッキー・ストーン (Jackie Stone) 教授は日本中古天台における観心主義についての見解を示された。この発表は近年の中古天台に関する諸研究を踏まえ上で、日本の仏教学者もあまり顧みない様々な口伝などの文献を綿密に調査した力作であった。欧米人の天台研究も、このような高い水準に達しているのかと、つくづく感心させられるペーパーであった。

周知のように日本中世の中古天台では、しばしば経文を解釈するに当たって、それを忠実に(文字通りに)解釈する所謂教相主義の立場を否定し、経文を主体的に受け止め解釈する観心主義的解釈の方法が用いられた。今日この観心主義はテキストの内容を無視した独断的な解釈法として片づけられがちであるが、ストーン教授によると、このような見解は観心主義的解釈

法を誤解するものである。そもそも観心主義は、あるテキストの意味を文字通りに解釈しようとするものではなく、一つの先験的 (a priori) 立場を様々な手法でテキストのなかに読み込もうとする解釈法である。当時天台宗の密教化にともない、様々な口伝が作られ師資相伝されていたが、この観心主義的解釈法も、そのような天台教団の状況の中から生み出されたものである。

ストーン教授は数年来、中古天台の観心主義を仏教思想史の中に位置づけ、それを日本仏教の一形態として客観的に把握しようとする研究に従事されているが、今回の発表はその研究を集大成したものと感じられた。その発表では観心主義の背景を概説し、観心主義的經典解釈の中で用いられる様々な解釈法(独創的な読み下しや、阿弥陀の三字を空仮中の三諦に当てはめるような、いくつかの異なった事柄を相対させて解釈を行う方法など)を、特に室町時代の尊舜(一四五―一五一四)の著わした『文句略大綱私見聞』によって具体的に説明された。

中古天台はすべての衆生は本来仏であるという、所謂本覚思想の立場に立つことはよく知られているが、ストーン教授によると、天台の根本聖典の法華経自体には、そのような本覚思想的解釈を肯定する箇所はあまり見られない。しかし尊舜などは、観心主義的解釈法を駆使することにより、この経を新しく本覚思想を説く經典として読み変えてゆく(教授の言葉を借りるなら、法華経を「再発明」[reinvent] してゆく)のである。特に本覚の立場と矛盾する箇所では、独特の解釈を施すことによ

りその箇所を本覚思想的に読み変えようと努力しているのである。

最後にフランス高等学術研究院 (École Pratique des Hautes Études) のジャン・ノエル・ロベール (Jean-Noël Robert) 教授は「法華經の詩的注釈書—慈円の『法華百集』について」(A Poetical Commentary on the Lotus Sutra: The *Hokkehyakushu* by Jien) の中で、慈円 (一一五五—一二二五) の和歌集『法華百集』を紹介された。慈円は天台座主を四回努め、『愚管抄』の作者としても有名な僧侶であるが、彼は優れた歌人でもあった。慈円の『法華百集』については従来あまりよく研究されていないようであるが、それは法華經を題材とした和歌を約百四十五首集めたものである。このような特殊な、決してポピュラーではない書物に注目したロベール教授は、その中からいくつかの和歌を選び出し、それらを文学・仏教教理の両面から緻密に検討することを通じて、『法華百集』の中に現われる法華經觀を浮き彫りにし、鎌倉時代における法華經解釋の興味深い一面を垣間みさせてくださった。

四

学会初日では以上の様に、朝九時から午後五時半までのあいだ、七つの研究発表が連続して行われ、そのため夕暮れには参加者はみな疲れ果ててしまっていた。しかしこの日のペーパーから、大きな刺激を受けたのは私一人でなかったはずである。私は次の日には自分の発表も控えていたので、ホテルに戻って

早く寝ることにしたが、ベッドに入っても各々の発表の問題提起が頭を離れず、興奮して眠りにつくことができなかった。しかたなく、朝五時にはベッドから起き、発表原稿の最終チェックをしながら、日の出を待つことにした。

五月三日は日曜日で、大学にはほとんど一般の学生はいなかったが、この日も午前九時半から学会が再開された。

◇第三セッション 司会 マイケル・バイ (Michael Pye)

マープルゲ大学

テーマ「法華經から引き出された成仏の教義」
(Doctrines of Buddhahood Drawn from the Sutra)

このセッションでは、法華經における悟りと成仏を主なテーマとして、三人の発表がおこなわれた。まず最初にバージニア大学のポール・グローナー (Paul Groner) 教授が「天台即身成仏説における身体的なものは何であるか」(What's Physical in Tendai Theories of *sokushin jōbusu* [the Realization of Buddhahood with this Very Body]?) と題された、日本天台における即身成仏についての大変興味深い発表を行った。グローナー教授は *Saichō: The Establishment of the Japanese Tendai School* (『最澄と日本天台宗の成立』、一九八四年出版) という伝教大師最澄についての優れた研究を著わしているが、最近では日本天台における即身成仏について研鑽を深め、このテーマについて一連の論文を発表されている。今回の発表もそれを踏まえたものであった。今回は特に即身成仏の「即身」という

語に注目し、即身成仏についての円仁の見解を弟子の憐昭が記述した『天台法華宗即身成仏義』などの資料を駆使して、天台の論書の中で「即身」の成仏がどのようなものとして理解されているかを考察された。いうまでもなく即身成仏とは凡夫が一生において成仏することである。しかし凡夫が成仏するとき、業報としての分段生死の身を捨て、法性身を得ることによって成仏するのか、分段生死の身を捨てることなく成仏するのか、という点が大きな問題となった。この点について多くの天台宗の学僧たちは凡夫はその生まれながらの身を捨てるのではなく、その身を「転ずる」ことによって即身に成仏するのであると説き、これが天台宗一般の解釈となった。以上がグローナー教授の発表の要点であった。

つぎに私の「慈恩大師の法華経解釈」(T'zu-en's Interpretation of the Lotus Sutra)であるが、この中で私は唐代法相宗の慈恩大師基の『妙法蓮華経玄賛』を取り上げた。周知のように、法相教学は、当時インドで流行していた護法の唯識教学を玄奘三蔵が中国へ伝えたものである。この法相宗の独特の救済論は有名な五姓各別説にもとづいて展開されている。この学説はすべての衆生を五種類に分類し、この五姓の衆生の内、ただ菩薩種性の者と不定種性の一部の者のみが成仏できると論じ、無性有情(つまり一闍提)に至っては永遠に生死から解脱することはできないと主張するものである。当然のことながら、これはすべての衆生の成仏を約束する法華経の一乗思想と矛盾する。そのため法相教学を中国に定着させるためには、五姓各別

説と法華一乗説を会通させる必要があった。それをみごとな形で行ったのが玄奘の弟子である慈恩大師であった。彼は法華玄賛の中で五姓各別説の立場から法華経を注釈し、法華経自体は一乗の教えこそ真実であると主張しているにもかかわらず、法華の一乗思想は実は方便であり、真実の教えはすべての衆生の成仏を認めない五姓各別説であると力説した。従来西洋では『玄賛』とその法華経解釈はほとんど知られていなかったが、それを欧米に紹介することが私の一つの大きな目的であった。

午前最後の発表は中華仏学院のブルック・ジボリン(Book Ziborin)教授の「どのように意思を過去に向けるか―法華経における時と亡念と繰り返し」(How to Will Backwards: Time, Forgetting and Repetition in the Lotus Sutra)であった。この中で教授は法華経に見られる舍利弗授記の物語を取り上げられた。法華経のなかで、舍利弗は釈尊から未来に成仏して華光如来となるであろうという内容の授記を受けるが、授記を与えるとき釈尊は、かつて舍利弗は菩薩道を歩んでいたが、それを忘れて声聞道に陥り、阿羅漢果を証してしまったと述べている。天台では、このような舍利弗のありかたを本迹の関係で説明する。つまり天台智顗は『法華文句』の中で舍利弗は本来、金龍陀という名の如来であったが、衆生教化のため相次いで外道、凡夫、声聞、菩薩として示現したと論じている。そこでジボリン教授は、この舍利弗授記についての伝統的な天台の解釈を様々な資料を使いながら紹介し、舍利弗にとって仏道を実践するということは、本来自分が如来であったことを完全に

忘れ去って声聞道を歩むことにはかならない、という一見矛盾した点に着目し、その点について独自の理解を熱意を込めて語ってくださった。

◇第四セッション 司会 ジョージ・タナベ (George Tanabe) ハワイ大学

テーマ「法華経にもとづく実践」(Lotus-inspired Practice)

学会最後のこのセッションでは立正大学の北川前肇教授と大正大学の斎藤円真教授の発表があった。北川教授は「法華経信仰者の理想像ー常不軽菩薩を軌範として」(An Ideal of the Adherents of the Lotus Sutra: the Figure of Bodhisattva Sadaparibhuta as a Guiding-model) において法華経に見られる常不軽菩薩を取り上げた。このペーパーは、この菩薩の生き方に法華経信仰者の理想像を見い出そうとする宗教心に満ちたものであった。また斎藤教授の「唐における円仁と在家信者」(Ennin and Lay Buddhists in Tang China) は求法のために八三八年に入唐した円仁を、様々な面から支えた中国の在家信者たちについて考察したもので、円仁の日記である『入唐求法巡礼行記』のみならず、中国の正史や僧伝などを駆使した優れた発表であった。

斎藤教授のペーパーをもって、すべての研究発表は終了したが、最後にタナベ教授が一つのペーパーについて簡単にコメントし、学会全体のまとめをおこなった。そしてそれを受けて、

出席者全員によるディスカッションがおこなわれ、様々な課題が討議された後、学会は閉会した。その後、場所を中世の邸宅を改造したレストラン、De Regentkamerに移して晩の七時からレセプションがあった。その場では三友健容博士が閉会の辞を述べられ、将来どこかで開催されるであろう第五回国際法華経学会で再開することを誓いあって、今回の国際法華経学会の幕は閉じられた。また、次の日は大学の休日であったにもかかわらず、学会開催者の特別な配慮により、ライデン大学のアジア研究のセンターのひとつになっているケルン研究所を見学する機会を与えられた。

五

さて、以上のようにこの学会では、様々な角度から法華経とこの經典に基づく思想や実践が取り上げられたが、最後にこの学会全体についての感想をいくつか述べて私の報告を終りたい。まず第一に感じることは、過去数年間のあいだ、欧米における法華経・天台教学の研究は飛躍的に発展したことである。欧米には難解なテキストを自由にあやつり、日本でもあまり顧みられない文献を取り上げて研究を進めている学者が多く誕生し、今後ますます増えてゆくであろう。彼等・彼女等の今後の活躍が大いに期待される。

第二に、欧米から参加した学者の発表の中には、以前にはあまり見受けられなかった新しいテキスト観を提示するものが多い。従来、法華経なら法華経という一つの文献は固

定したもので、その中には本来的に一つの明確なメッセージ（意味）が内在していると考えられてきた。しかし近年欧米（特にアメリカ）では、このような従来のテキスト観は多くの研究者によって疑問視されている。彼らによるとテキストは常に流動的であり、従ってそのテキストの意味も読者の視点や時代背景によって変化するものである。そのため彼らはミシェル・フーコーの「いかなる社会においても言説の生産は、それを同時に統制し、選択し、組織し、再分配するための幾つかの手順がある……」^①という指摘を受けて、ある言説（文献やその解釈なども含む）が如何にして生産され、流布してゆくかを具体的に考察しようと試みている。換言するならば、彼らの関心は、文献の原典研究やその解説から（これはもちろん大変重要なことではあるが）、フーコーの言う言説（テキスト）の「系譜」（genealogy）の研究に向けられているように感じた。

今学会でこの点を直接問題にした一人にスチーブンソン教授があった。その発表のなかで教授は、中国では法華經に関連した經典や、あるいは法華經の散逸部分と自ら称する文書が、多く作成され続けた点に注目した。つまり中国では、様々な理由によって様々な人物があらゆる時代において、法華經の一部と自称する書物を偽作することによって、自分の意図するように法華經を改変しようと努力していた形跡が明らかに見られるのである。そして、先に紹介したように、その偽作文獻の中には無量義經や觀普賢經のように正統な經典と承認されたものもあれば、度量品のように偽作として排斥されたものもあった。要

するに中国では法華經は常に拡大される傾向にあったのである。このような状況に対して、中国の僧侶たちは法華經の拡大する傾向を警戒し、それに抵抗し、新出の書物の真偽を確定することにより、その拡大の方向を統制し、制御しようしたのである。その努力の結晶が中国で多く編纂された経録として今日残されている。しかし僧侶の努力にもかかわらず、法華經関連の經典や諸品は作り続けられた。以上がスチーブンソン教授の発表の要点であるが、その中で教授は、法華經はある固定した形を本来的に有するのではなく、その内容は常に流動的であったことを指摘し、さらには今日まで伝わったいえる法華經は、この經典を拡大しよとする人々と、その傾向に歯止めを加えようとする人々とのあいだの、たえまない格闘の中から作り出されたものであることを明らかにされた。

しかしテキスト自体が常に変化する傾向にあるだけではなく、テキストは新しい解釈を与えられることによっても変化する。この点を克明に解明されたのはストーン教授の発表であった。教授は中古天台の僧侶が「観心」という独特な聖典解釈法を用いて法華經に新しい意味を与えていった過程を考察した。先に述べたように中古天台では、ある先験的直感や思想的視点に立ちテキストを理解しようとする観心主義的解釈法が流行したが、この解釈法をもつて一切衆生は本来仏であるという本覚思想的立場を法華經に読み込むことにより、本来は本覚思想とは縁の薄い法華經が新しく本覚思想の聖典として再形成（reconfigure）されたのである。このようにして、中古天台

の時代において法華経は、観心主義的解釈法により、新しい意味を与えられ、新しい形に再生され受容されたのであった。

はからずも私の発表もストーン教授の視点と類似するものがあつた。先に述べたように、私は慈恩大師の『法華玄賛』に現われる法華経観を取り上げた。法華経自体が一乗こそ釈尊の真実の教えであると繰り返し説いているが、それにもかかわらず慈恩大師は法相宗の五姓各別説に立脚して法華経を三乘真実一乘方便の立場から注釈している。これは単に慈恩大師が誤つた解釈を施しているとして片づけられる問題ではない。それは仏教の伝統自体が、ある經典の表面的意味と正反對の視点から解釈することを可能にする解釈学的方法を有しているからである。ここでいう解釈学的方法とは、いうまでもなく法華経自身が提唱する方便の思想であるが、この方便の思想をもつて初めて慈

恩大師は、法華経自体が真実と主張する一乗の教法を方便の教えと位置づけ、法華経を三乘真実の立場から解釈することができたのである。つまり、法華経のみならず、すべての仏典の主張は、他のより高い立場からすれば、単に方便に過ぎないと解釈され、決して究極的教えではないと解釈される可能性をはらんでいるのである。このように考えてくると、經典の「意味」は經典そのものの中に本来的に内包されているとは考えにくい。もし經典に「意味」があるとすれば、それは經典とそれを受容する人々との（つまり、アメリカの著名な英文学者であるスタンレイ・フィッシュ [Stanley Fish] の言葉を借りるならば「解釈者の共同体」 [interpretive community] との）相互作用の

なかに見い出されるものではなければならないことになるであろう。

このように、いくつかの発表は法華経のテキストを確固たる不変の意味を持つものとして、実体的に受け取ることに對して疑問を投げ掛けていた。もしこのようなテキスト論的を得ているのであれば、經典の意味は、決してその中に先天的に存在するものではなく、様々な具体的行為（実践・practice）を通じて、それを受容する人々がその中に発見するものであることになろう。では、このような歴史的産物たる經典の中に、普遍の真理を見い出すことというのは、どのようなことであろう。これこそ現代という時代に仏の言葉（經典）を所依として生きようとする我々に投げかけられた大きな課題ではなからうか。

① "In every society the production of discourse is at once controlled, selected, organised and redistributed by a certain number of procedures..." Philip Rice and Patricia Waugh ed., *Modern Literary Theory: A Reader*, Second edition (London: Edward Arnold, 1992):221.